No.2916

せめぎあいの場としての村落――ネパール、グルン社会における宗教的対立をめぐる人類学的研究

首都大学東京大学院　人文科学研究科
博士後期課程
吉元 菜々子

本研究は、ネパールの少数民族グルンを対象とした人類学的調査を通じて、グローバルに展開するグルンの民族運動において表出する宗教をめぐる対立的状況を、村落というローカルな場に着目しつつ明らかにすることを目的としたものである。具体的には、近年、寺院・僧院建設という形で顕在化しつつある村落部における民族運動の影響と宗教をめぐる対立的状況に焦点を当て、グルン社会における宗教をめぐる今日的な言説と、国境を横断して展開する民族運動における村落の戦略的価値を明らかにすることを目指している。

助成一年目である 2018 年度は、文献研究および 2 回の現地調査を実施した。そこでは、村落部における寺院・僧院建設が積極的に進められている状況を確認することができたが、一方で、建設の規模や主体は非常に多様であることも明らかになった。たとえば、自宅を改装して作ったこぢんまりとした寺院・僧院もあれば、大規模な寄付を募って数億円の予算をかけて建築するものもあり、その設立主体も個人から村落規模までさまざまである。こうした状況から、チベット仏教を推進する人びとも土着の民俗宗教を推進する人びともそれぞれ決して一枚岩ではないこと、現在村落部において進行する寺院・僧院建設の背景にはチベット仏教と土着の民俗宗教との間の対立状況があるものの、それだけではこの現象を説明しきれないことが明らかになった。

グルン社会では、自らの私財を投入して公共施設を建築することが、その人物の名声の獲得と誇示につながる。このことを考慮すれば、近年進められている村落部における寺院・僧院建設には、個人、リネージ、クランレベルでの名声の獲得という動機も関連している可能性がある。したがって今後は、宗教的な対立状況と個人的な名声の獲得という動機の絡み合いに着目して調査・研究を進め、村落部における寺院・僧院建設という現象を解きほぐしていきたい。